

# 『石元泰博—写真という思考』刊行記念トークイベント記録

日時——2010年5月29日(土) 18:00—19:40

会場——青山ブックセンター

トークのテーマ——

写真と写真集の理想

出演——石元泰博、内藤廣、森山明子<司会>

関連イベント——

ブックフェア「石元泰博 21世紀の書棚から」



森山——『石元泰博—写真という思考』の刊行を記念するトークショーにこのように多数ご参加いただき感謝申し上げます。グラフィックデザイナーの故・田中一光さんは石元さんについて「デザイナーに最も影響を与えた日本人写真家」と雑誌『クリエイション』に書かれました。その言葉どおりに、この会場には写真のみならず、デザイン、建築、ファインアートの関係者が大勢おられるようで、嬉しい限りです。私は武蔵野美術大学の森山明子と申しまして、今日は石元さんの写真の世界へご案内するガイドの役を果たしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

この5月、ヒューストン美術館+イエール大学と六耀社から石元さんの写真による桂離宮関連の書籍が2冊発刊されました。さらに10月には水戸芸術館で出品点数500点という大回顧展が予定されており、2010年は後々、「石元泰博ヴィンテージイヤー」と呼ばれることになるという予感があります。本日はまず『石元泰博—写真という思考』に掲載された代表作100点余をスライドショーでご覧いただき、次いで各章の扉に配した写真について解説を加えます。石元さんと建築家の内藤廣さんにご登壇いただくのはその後で、トークは1時間を予定します。それでは早速スライドショーと致しましょう。

——作品解説略——

## シカゴの第一印象は大いなる田舎

森山——石元さんと内藤さんのお二人に登壇いただきますので、拍手でお迎えください<拍手>。先ほど説明したように、石元さんの在米年数はトータルで20年に及び、ブックフェア「石元泰博 21世紀の書棚から」には『壊れゆくアメリカ』や『ルポ貧困大国アメリカ』といった本が並んでいます。最初の質問です。石元さんは現在、アメリカに関してどのような感慨をお持ちなのでしょう。

石元——僕が学んだインスティテュート・オブ・デザイン (ID、通称ニューバウハウス) というのは今もあるのかどうか知らないんだけど<笑>、入学はモホイ=ナジの死の2年後だったの。でもナジのことなんか何にも知らずに入っちゃった。日本に帰って来てから、随分ともらったいつけて評価されているものだと思ったくらい。というのはコロラド州にあった日系人収容所のアマチ・キャンプから出るんだけど、どこへでも行けたわけではなかった。同じキャンプにいたトシ・マツモトはニューヨークへ行ってファッション写真を撮りますが、僕のように日本で教育を受けた「帰米二世」はニューヨークといった沿岸部へは行けなくて、それ

で許された内陸のシカゴへ向かったんです。

理由の一つは、欧州戦線で窮地に陥った米軍「テキサス大隊」救出のために日系兵の多くが死亡した戦いの直後に、デンバーの新聞にそれに抗議する5行くらいの詩を寄稿したのね。「砂漠の中に羊を囲って、毛を取り、肉まで取るのか」といった詩——それもあって行く先が制限されたんだね。

森山——石元さんにとっては、アメリカと言えばシカゴ、そしてIDのようですね。どうぞ続けてください。

石元——シカゴではシルクスクリーンの仕事に就き、ハリー・シゲタという割合いいカメラマンの紹介でフォート・ディアボーンというカメラクラブに入った。そのシゲタさんがロサンゼルスにあったアート・センターとシカゴのニューバウハウスを勧めてくれて、せっかくシカゴに住んだんだからとIDに入った。何も知らずに、写真学校かと思ったらデザインの学校だった。先生はハリー・キャラハンで、ニューヨークから来た学友のニューマンはキャラハンを知っていたけど、自分は何も知らなかった。後で日本に個展のためにやって来たキャラハンに聞いたところでは、かなり迷ったんだって。

森山——ポートフォリオを見て入学させようかどうか迷ったということですね。

石元——そうなの。カメラクラブの写真はまだピクトリアリズム（絵画主義）的だったということでしょう。写真の動向なんて何にも知らなかったから……。

森山——ID入学前にノース・ウェスタン大学の建築科に入っていますが。

石元——そうなんだけど、1年足らずで辞めて、写真をやることにした。で、ハリー・シゲタが勧めてくれたニューバウハウスに入学。学生は140人くらい、写真学生は5人。学生より先生の数の方が多かった。

森山——何と贅沢な！でも石元さん入学時の在學生は400人と記録にあります。

内藤——それは1学年が140人ということでしょう。

石元——そうそう。学生が少ないこともあって、しょっちゅうフラーやワックスマンとランチを一緒にした。特にワックスマンは親しくしてくれて、友達みたいだった。

森山——その二人はバックミンスター・フラーとコンラッド・ワックスマンで、私たちにとっては歴史上の人物ですよ。ところでシカゴの初印象はどんなものでしたか。

石元——当時ニューヨークに次ぐアメリカ第二の都市なんだけれど、ニューヨークとは違ってシカゴは田舎の街という感じ。田舎の良さはあり、新しい建築発祥の地ではありましたが、でも半分は素朴な街だった。僕は行きたかったニューヨークに行けなかったから特にそう感じたのかもしれないんだけど。

## 写真と写真展の理想

森山——この在学中、次いで1958年からの3年間石元夫妻はシカゴに住んで写真漬けの日々を送ります。その成果が写真集『シカゴ、シカゴ』（1969年刊）なのですが、内藤さんに質問です。シカゴにおける建築と都市の特性、それと石元さんが撮ったシカゴはどんな関係にあるとお考えでしょうか。

内藤——難しい質問ですね。さっきは投影されなかった、石元さんが街を俯瞰して撮ったほとんど真っ黒な一枚に僕は心底驚きました。シカゴには何度か行きましたが、僕が見たシカゴと全然違うと思った。乾いた都市というのはああいう風に見えるのかと——。シカゴという街は大火災があって、サリバンやライトやミースといった人々による新しい建築が興った歴史があります。一種のバブルがあって、超高層がばんばん建てられた。石元さんが住んだシカゴはそれが落ち着いた



頃だったでしょうが、そうした街とそこに住む人々の気分が写真から伝わってきます。

森山——写真集『シカゴ、シカゴ』の前に日本橋の白木屋（東急デパート）で1962年に同名の写真展が開かれています。その写真展の会場デザインを担当されたのが、実は30歳の杉浦康平さんなのです。杉浦先生が会場にいらっしゃいますので、その経緯と写真のインパクトについて一言いただきたいと思うのですが、皆さんいかがでしょうか。〈会場・拍手〉

石元——白木屋の展示は8×10インチの同サイズのこぶりな写真に、何箇所か巨大に引き伸ばしたパネルがあって、そう、杉浦さんが担当してくれたんです。

杉浦——いきなりの質問ですね。一言で言えば非常に恐かったですね、石元さんの写真を扱うということ自体が。あの当時のデザイナーはみんな、石元さんの端正を通り越して厳格な写真に敬意と恐れを抱いていました。画面がきちっと決まっていて端正で厳格、それに深い人間観察が感じられ、まるで修行僧が撮影する写真のように思えましたから、トリミングも拡大もできない。石元さんが焼いたプリントのまま展示しなければならぬと肝に銘じたのです。でもそれだけでは空間がもつのかという問題があって、巨大な写真パネルを背景に置いてみたわけなんです。

いま、思い出したことがあります。『SD』（鹿島出版会）という雑誌があり、その当時の編集長だった平良敬一さんの発案で石元さんのシカゴの写真を掲載したことがあるんです。強烈に覚えているのは、写真の凄さもさることながら、キャプション用に石元さんが持って来られたのがシカゴの新聞の切り抜きだったこと。シカゴの一日の出来事の風変わりなデータで、例えば酔っぱらいが何人、ゴミが何トン、自動車事故が何件など。それを僕は写真の下に流し、当時としては最先端の写真とキャプションの出会いを提示することになりました。どちらが先だったかは判然としませんが（筆者註・『SD』創刊は1965年）、「シカゴ、シカゴ」展では石元さんが先ほど説明して下さったとおり、グループ分けの意味も込めておそろおそろ巨大パネルを用意した。それが効果的だったのだと思います。

石元——あんな写真展は当時なかったね。

森山——その記念碑的な展覧会の会場写真は本（『石元泰博—写真という思考』）に2点収録してあります。勇気を奮って聞いてみるものです、杉浦先生ありがとうございました。〈会場・拍手〉

### 写真と写真集の理想

森山——展覧会から7年後、今度は亀倉雄策さんのデザインで美術出版社から写真集（『シカゴ、シカゴ』）が出ます。カバーは「ロリータ」を思わせる少女で、文中ではなぜそれが選ばれたかは謎だと書きましたが、この本の発刊後、担当編集者だった上甲ミドリさんから電話をいただき「あれを亀倉さんに提案したのは私」かどうかがありました。ここだけの話です。シカゴの写真があまりに厳格でハードであるため、それとは違う一枚をカバーにしたかったのが提案の理由だったそうです。

石元——そう、それは知らなかった。〈会場・笑〉

森山——この写真集にはどなたもご存じの瀧口修造さんが文章を寄せ、編集にも参画しました。名文だと思うのですがいかがでしたか。

石元——大辻清司さんがグラフィック集団、それと実験工房なんかを通じて瀧口さんを知っていて、それで書いてくれたんだと思う。

森山——『シカゴ、シカゴ』が会心の写真集である理由を編集、印刷についてう



かがいます。1000枚の紙焼きを最後は202枚に絞るんですよ。

石元——モノクロの2色製版を亀倉さんが指示したんだけど、ページに光を当てると、凹凸があって黒とグレーが二重になっていることがはっきり見えるでしょ。これは凸版であって、僕はグラビア印刷は好まない。編集については亀倉さんが「デザインも少し分かるだろうから石元、お前がやれよ」と言ったので、家に持って帰って、ワイフと二人で並べてみて、それを亀倉さんがだいたいそのとおりにしてくれたの。

森山——「デザインも少し分かる」ですか。そうすると亀倉さんが巻末の「ノート」で書いた瀧口、大辻以上に写真の流れについては石元さんと滋子さんの夫婦合作だったこととなります。それが「会心の写真集」最大の理由だとするなら、この話題はこれで終わりにしてよさそうです。素晴らしいエピソードでした。

### 建築写真家ではなく写真家

森山——内藤さんは六耀社から出たばかりの『桂離宮』の序文を書かれています。さらに「海の博物館」をはじめとするご自分の写真集4冊の撮影が石元さんという幸運な方です。石元さんの建築写真の特質についてお話しください。

内藤——石元さんの建築写真は戦後建築写真の歴史そのものなんです。それと同時に——メディアの方がいらっしゃると言いにくいんですが——石元さんの写真のクォリティーがメディアで表現できなくなっていく歴史でもあります。それが被写体のせいなのかメディアのせいなのかは即断できないのですが、で、いろんな意味で、石元泰博という存在を掘ると戦後建築のさまざまな問題が浮かび上がって来るはずですよ。石元さんにとっては、撮るに足るものが減っていく歴史かもしれない。

ですが、石元さんを建築写真家と呼んではいけないで、写真家なんですよ。そこがもの凄く大切なところだと思います。建築家が意図したものをすくい取るのではなく、その背後にあるその時代の文化的な状況が写り込んでしまう。

先ほど杉浦先生が言われたように厳格であり、対象に容赦がないですよ。なので、その厳格で容赦のなさを引き受ける被写体もメディアもなくなっていくと言うか……。

杉浦——でも、厳格で容赦はなくとも、一方でどこか温かみがある。

内藤——そうなんです。石元さんのことをみんな怖い人だと言うんですが、僕も付き合う前はそう思っていました。ところが付き合ってみるとそんなことはありませんでした。石元さんが対象に向かう時にはいつも鬼気迫る気配があるものだから、それを外側から見ると怖い印象となるのでしょう。

森山——1953年に帰国早々、ある建築雑誌の編集室を出るなり、石元さんが「日本の社会って嫌な社会ね」と吐き捨てるように口にしたと宮内嘉久さんは憶えていましたよ。

石元——自分は覚えてない。でも宮内嘉久さん、川添登さん、平良敬一さんと、建築メディアには当時人がいたね。みんなよく知っていました。

森山——内藤さんの発言は、浜口隆一さんの有名な石元評である「石元の悲劇は、彼のレンズに耐える建築の日本になかったことですよ」と重なりますか。

内藤——石元さんも浜口さんもご自分に厳しい方ですが、建築評論家の浜口さんはその言葉どおり、筆を折りましたよね。建築に失望したことでその建築について書くことを止めた。石元さんは建築写真家ではなく写真家ですから、筆を折ることも建築を撮るのを止める必要もなかったということではないですか。

森山——なるほど、先の発言はそういう意味だったのですね。



石元——浜口さんはロックフェラー財団のスカラシップでアメリカに留学して、帰国する直前にワックスマンを訪ねてシカゴに来た。ワックスマンが「ここに日本人の写真学生がいる」と教えて、それで会ったんだよね。1953年に自分が日本にやって来た時、だれも知り合いがいなくて、浜口さんをまず訪ねました。それで最初に紹介されたのが丹下健三さん、そして前川國男さん、吉阪隆正さん、それからデザイナーなんだけれども、丹下さんが日本デザインコミッティー（元・国際デザインコミッティー）のメンバーとして他の人々と一緒に自分も推薦したみたいな。これは最近、丹下夫人でいらした加藤とし子さんから聞いたんだけど。

森山——そうだったんですか。で、浜口さんからは、「素晴らしい才能をもった写真学生がいる」とワックスマンが言ったとうかがいましたよ。

石元——それ知らない<会場・笑>。ワックスマンは建築、自分は写真だったんだけど、さっきも話したように彼はなぜだか随分と可愛がってくれたんだよね。

### 無常とわび・さびは違うか

森山——話題を2004年刊の『刻(とき= moment)』に移させていただきます。落ち葉、空き缶、雪のあしあと、雲といった被写体なのですが、そうしたうつろうものは1993年撮影の『伊勢神宮』と気持ちの上では重なりますか。

石元——みんな近所で撮ったもの、歩いて行けるところばかりだね。落ち葉も空き缶も家から五反田までの間、川面は目黒川、雲は家のベランダにカメラを据えての撮影だから。でも道は舗装されて落ち葉も空き缶も今は撮れないし、雲は周りにビルがたくさん建ってもうダメなの。雪のあしあとはうちを出たばかりのところ。そういうものを撮っていると、歩いている人は何をしてるか分からないから不思議がられ、怪しまれた。<会場・笑>

森山——内藤さんからはどんなカメラで撮ったか聞かれて答えられず、「そんなことも知らずに本を書いてはいけない」とたしなめられましたよね。

内藤——そうでした。知りたい読者も多いでしょうから。

森山——機材のことは分からないし「インナー・ヒストリー」を書きたい私にとってはそんなに重要でもないので、写真の専門家が別の本を書いてくださることが著者としての本望です。それで、カメラとフィルムのサイズでインチとセンチを混同して間違っている箇所があって、この場を借りてお詫びします。では、聞いちゃいましょう。石元さん、例えば雲の撮影に使ったカメラは何でしたか。

石元——雲はハッセルだけ。空き缶と落ち葉は全部35ミリのキヤノン製。

森山——ということでした。でも雲にしても劇的な夕焼けや入道雲などは絶対に撮らないのはなぜですか。7章扉の雲はまだしも、他はパワーとしたものばかりですよ。

石元——どうしてそうだったかは分からないんだけど、撮らないの。夕焼けなんかはロマンティックだと思うけど、撮らないことになったのよね。

森山——桂離宮にしても、内藤さんは「月下の桂」はなぜ撮らないか質問なされたことがありましたね。

内藤——訊いたんだけど答えてもらえなくて、それ以上は追求できませんでした。

森山——困りましたねえ。私が推測するに、その理由は石元さんが何度か発言しているニューバウハウスの構成教育の弊害だという「デザインのすぎる欠点」と関係するように思うのです。つまり写真家の意図で世界を切り取りたくないという……。偶然を大事にするという姿勢とも関連して。

石元——どうなんだろう、分からない。



森山——では別の質問をします。石元さんのこの時期の写真は「無常」を写してはいても「わび・さび」とは無縁だと感じるのですがいかがですか。無常は現象、わび・さびはそれが心理に反映したものだとするれば。

石元——むつかしいなあ。ちょっと考えさせてね。ううん、わび・さびとはちょっと違う格好で撮ってはいるよね、確かに。

森山——それでは内藤さん、桂離宮の写真にわび・さびを感じますか。

内藤——ちょっと考えさせてください、僕にも<会場・笑>。その問題は生きていらしたら伊藤ていじさんに聞きたかったですね。それでは石元さんが考えてる間に僕が目撃した石元さんについてお話しします。

「行きあたりばったり」みたいな発言を石元さんはしていますが、そんなことは決してないと思うんです。「海の博物館」を撮っていただいた時、朝から夕方までの動き方に驚かされました。動きが大きいんです。普通ならここで撮ったら少し動いて違うショットを撮る——そんな撮り方かと想像していたのですが、ある光の状態下で、大きく移動して異なるポイントを次々に撮っていかれた。頭の中で光の状態と撮り方が、最初からビジョンとして完璧にあるように感じましたね。ある種デジタルな、緊密な思考の存在がうかがえたのでした。

それと、写真ができたというので少し早めにご自宅にうかがうと、テーブルの上でびりびりとプリントを破いておられたんです。もったいなくて破く予定の紙焼きをいただいて帰りましたが、凄いとしました。対象について掴まえないイメージが完全な形であり、そのイメージに到達するために限りなく厳密に、撮り、焼いて、選んでいることが。

森山——それでは石元さん、わび・さびについてはどうでしょう。

石元——やっぱり分からない。<会場・笑>

### 螺旋の時間と偶然について

森山——ライター泣かせな方なんです。別の質問として、「伊勢神宮の時間は螺旋で上昇していく時間」という発言と、石元さんが好む『方丈記』や『平家物語』との関係についてはどうですか。

石元——伊勢を撮影する中で、日本の時間というのはまっすぐでなくて前後する、螺旋状に回る時間のように感じたのね。

内藤——それについては補足します。石元さんがフランスかどこかで講演することになって、質問されたんです。「内藤さん、ヨーロッパの時間と日本の時間ってどうなの」と。石元さんの電話はいつも極端に短いのですが、その時は珍しく30分くらい話しました。それで僕はやや苦しまぎれに「Eternity と Endless」の対比で答えました。ヨーロッパの時間は現在を起点にしてずっと続く永遠、日本は始まりもなく終わりもない無限といった時間観なのではないでしょうか。そんな対話がありました。石元さんが伊勢神宮を撮っていた頃だと思います。

森山——伊勢神宮撮影は式年遷宮の年の1993年、翌年アルル国際写真フェスティバルで個展と受賞式に臨みますから、そのスピーチのためだったでしょう。

石元——内藤さんとは「時間の矢」のことなんか話したかもしれない。日本の時間はどうも曲がっちゃって、四季がはっきりしているのと関係があるように思うのね。

森山——アジアの時間、イスラムの時間というテーマもあるわけですが、私の初取材の時の発言「デザインのすぎる欠点」はもう思っておられませんよね。

石元——ああ、なんでも型にはまっちゃうという問題ね。いや、今でも思っているの。壊したいんだけど、壊せない。他の写真家のを見るとそうでもないんだ



けど、自分の場合は写真の四隅が決まりすぎていて、崩せないという……。

森山——大辻清司さんはそれを「贅沢な悩みでしょう」と評しました。それならボワッとした雲、偶然を手法とするカラー多重露光は構図を壊す試みだったわけですね。

石元——そうなんだけど、多重露光にしても、フレームに入っちゃうのよ。それぞれのショットが収まってしまうと、重ねて撮っても結局はフレームに収まるということなのかしらん。

内藤——『シブヤ、シブヤ』といったノーファインダーの場合はどうですか。

石元——ノーファインダーでも、カメラにもレンズにも慣れてると、こう撮ればこう入るとわかっちゃうからね。〈会場・笑〉

森山——多重露光は重ねの記録なしに、結果として4、5割は作品になってしまう。ノーファインダーでも同じだというのですから、何をか言わんやですよ、皆さん。そんなに出来過ぎたら、自由もなければ、面白くもないんじゃないですか、石元さん。

石元——面白くないよ。〈会場・笑〉

### ザ・ファミリー・オブ・マン展秘話と黒い羊

森山——会場に横浜美術館館長の逢坂恵理子さんがお見えです。建築、デザインに次いで、ファインアートの観点から石元さんの写真に対してどのような関心をお持ちかが知りたい。逢坂さんはこの秋に出品点数500点規模の石元さんの回顧展会場である水戸芸術館で長らくキュレーターをなさっていました。

逢坂——森山さん、ずるい！〈会場・拍手〉。その質問にはお答えせずにまったく違うお話しをします。小学校にあがる前、親に連れられていったのが「ザ・ファミリー・オブ・マン」展でした。展示写真のいくつかは、はっきりと覚えていて、石元さんの白人と黒人の少女の写真2点も記憶にあるんです。ですから私にとって日本人写真家の写真を見た最初が、石元さんでした。

森山——東京展は1956年開催です。それにしても小学校にあがる前とは！

逢坂——後にエドワード・スタイケンの企画で、石元さんは実行委員会のメンバーでもいらしたことを知っていますが、あの展覧会の作品群は私が写真に興味を持つようになるきっかけでした。で、石元さんに伺いたいのは、写真展は実際にどうだったのかということです。

石元——その展覧会は日常を撮った写真ばかり選んでいたのよ。スタイケンはそれ以前にMoMA（ニューヨーク近代美術館）で戦争写真の展覧会をやっていて、その時の経験と反省から「ファミリー・オブ・マン」を企画した経緯がある。戦争の写真を視た観客は、もう戦争をやってはいけないと思う前に、視た写真のことを忘れるというのよね。

森山——忘れるというか、忘れたいわけでしょう。

石元——そうかもしれない。それで戦争ではなく日常が大事とスタイケンは考えたみたい。でも日本ではああいうテーマは、ある意味で安手のヒューマニズムだということで批判もあった。アメリカではそんな批判はなくて、良かったでしょ。ニューヨークでの戦争写真展を自分は見ていないんだけど、スタイケンから意図を聞いて、日本での批判は間違ってると思った。

逢坂——大人になって知ったそうした批判に疑問がありましたので、石元さんのお考えを伺って安心しました。

森山——逢坂さん、ありがとうございます。戦争と美術は大きな問題です。戦争を美しく定着すると誤ったメッセージを發し、でも残酷なだけでは人々は目を



背けてしまうという意味で——。約束の1時間が過ぎようとしています。

私から石元さんへの最後の質問です。サンフランシスコで石元さんが誕生するにあたり母親の美根さんは知り合いから、「子供の一人に黒い羊が生まれる」と予言されました。冥界の神々に捧げられる「黒い羊」はその後、どうなったのでしょうか。

石元——それは産婆さんだった村山なみえ——朝日新聞創業者一族だと思う——が自分のお母さんに言ったこと……自分は、その黒い羊だったかもしれない。

森山——すべてを語らせようとするのはライターの悪い癖です。にも拘らず石元さん、答えにくい質問の数々にもお答えいただきありがとうございます。

——質疑・応答略——

森山——石元泰博さんと内藤廣さん、お疲れさま、ありがとうございました。拍手でお送りください<会場・拍手>。トークショーはこれで終わりにします。

(文責=森山明子、写真=須藤昌人)